

プロ野球ドラフト1巡目指名選手にみる相対年齢効果の再検証
—教育における選抜の構造的バイアスを問い直す—

森脇正博

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第8号

令和8年(2026)3月

プロ野球ドラフト1巡目指名選手にみる相対年齢効果の再検証

—教育における選抜の構造的バイアスを問い直す—

森脇正博

(神戸市立伊川谷小学校・元京都教育大学附属京都小中学校)

A Re-examination of the Relative Age Effect in First-Round Draft Picks in Professional Baseball —Reexamining Structural Bias in Educational Selection—

Masahiro MORIWAKI

2025年9月30日受理

抄録：本研究は、プロ野球ドラフト1巡目指名選手を対象に、誕生月分布（1965～2023年）と入団後成績（1970～2009年、総合的貢献度＝PV）を用いて、相対年齢に由来する影響の出現段階を検証した。指名データは均等分布から有意に偏在し、4～6月生まれが多く、翌年1～3月生まれが少なかった。他方、入団後の主要成績およびPVでは誕生月による有意差は確認されず、上位の選抜局面で現れた傾向が長期の成果に直結しにくいことが示唆された。以上より、初期選抜に年齢構成上の偏りが組み込まれる可能性が示される一方、その影響は後続のパフォーマンスでは希薄化しうることが示された。スポーツ領域に焦点化した本結果は、選抜設計・育成方略の点検に資する実証的基盤を提供するとともに、教育場面における評価枠組みの運用についても、偶発的要因の影響を抑制する観点からの再検討を促す。

キーワード：相対年齢効果、教師の見取り、構造的バイアス、教育評価、教育の公平性

I. 問題の所在

「生まれ月」という偶然に近い個人属性が、子どもの学力や運動能力、さらには進学・就職といった進路選択にまで、長期的かつ持続的な影響を及ぼしている現象は、「相対年齢効果（Relative Age Effect：以下RAEと略記）」として広く知られている。これまでから、国内外の多くの実証研究により、RAEは教育やスポーツの領域において確認されてきた。日本においては、学年の始まりが4月に定められているため、同学年内で最も年長である4月生まれの子どものと、最も年少である翌年3月生まれの子どもの間には、最大で365日の発達差が存在する。この差異は、初期の学校生活において身体的・認知的成熟度の優位性として顕在化し、教師からの注目や賞賛、リーダー的役割の付与、自己肯定感の形成といった教育経験において、有利・不利を生み出す要因となる可能性がある。

先行研究においても、学年初めに近い誕生月を持つ子どもほど、学力テストの成績は高く、進学率にも優位な傾向が見られることを指摘され、運動能力やスポーツ選抜においても、同様の傾向が報告されている。たとえば、榊原・尾見（2005）は、プロ野球やサッカーにおける選手の誕生月分布を分析し、4～6月生まれの選手が顕著に多く、10～3月生まれの選手が極端に少ないという構造的な偏りが明らかにされている。しかしながら、こうした誕生月と成果との関係を示す実証研究の多くは、統計的相関の提示にとどまり、それがいかなる教育的・制度的・文化的プロセスを通じて形成、強化されているかについては、必ずしも十分に論じられてきたとはいえない。

とりわけ重要なのは、教師が児童生徒をどのように「見取り」、評価し、日常の教育活動において、どのような期待や裁量を与えているかという点である。たとえば、授業中の発言機会の分配、学級役割の割り振り、リーダー的態度的評価といった一連の教育的判断において、発達の早晩や身体的な成熟度が「能力」や「適性」として認識され、それが教師の判断を方向づける可能性は否定できない。とくに小学校において、身体的に早熟な児童が「しっかりしている」「頼りになる」と評価され、学級の中心的な役割を担う一方で、早生まれの児童は「幼

い「未熟」とみなされ、相対的に周縁的な位置に置かれる構図は、学校の日常において繰り返し再生産されてきたのではないだろうか。こうした「見取り」のなかに潜む構造的バイアスの存在は、教育学的に精査されるべき課題である。

また近年の教育改革では、「個別最適な学び」や「形成的評価 (formative evaluation)」といったキーワードが重視され、子ども一人ひとりの状態を丁寧に把握し、柔軟に支援していくことの重要性が強調されている。評価の観点も、結果重視から過程重視へ、集団的比較から個別的観察へと移行している。しかし、その制度改革が実際に現場の教師のまなごしの変容を促し、誕生日によって生じる構造的格差を是正する方向に実効的に働いているかどうかについては、いまだ検証されていない。むしろ、教師に委ねられた裁量や即興的な判断が、無自覚のうちに RAE の温存や再生産に加担している可能性も想定される。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では、RAE の現象的側面を再確認するとともに、教育における選抜と評価のあり方に内在する構造的バイアスについて問い直すことを目的とする。具体的には、プロ野球という競争的かつ象徴的な領域において、ドラフト1巡目指名という選抜の最上位層に注目し、誕生日データと、活躍度指標 (Player's Value) を用いた量的分析を行う。これにより、誕生日が選抜および実績に及ぼす影響を実証的に検証し、その結果を教育的選抜における公平性の問題に照らして考察する。

つまり、教師の見取りや評価が相対年齢という偶発的屬性に影響される可能性を視野に入れながらも、現時点では因果関係の断定は避け、まずは量的な傾向の再確認に主眼を置く。その上で、RAE が教育的選抜の構造とどのように交錯しているかに照射し、今後の制度設計や教育実践に資する視座を提供することをめざす。

II. 先行研究の検討と教育的課題の抽出

1. 相対年齢効果をめぐる研究の蓄積

RAE に関する研究は、数多く積み重ねられている。日本に限って言えば、その多くは誕生日と学力・運動能力・進学・職業選択といった成果指標の関連を数量的に明らかにし、学年の制度的区切りが児童生徒や選手のパフォーマンスに与える影響を扱う。ここでは、代表的研究を整理し、その知見と限界を確認する。

榊原・尾見 (2005) は、プロ野球選手 751 名とサッカー選手 812 名を対象に誕生日分布を分析し、学年始めである 4~6 月生まれの選手が顕著に多く、学年終わりにあたる 1~3 月生まれの選手が著しく少ないことを示した。この結果は、学年制度が身体的成熟の差を競技能力の差として強調し、幼少期から選抜過程に影響する可能性を示唆する。この研究を発展させるかたちで、尾見・榊原 (2005) は、米国 MLB やイタリア・セリエ A の選手の誕生日を比較し、日本における RAE が相対的に強く表れていることを浮き彫りにした。しかしながら、諸外国における小学校入学制度に関する解釈が十分ではなく、批判的検討の余地を残すⁱⁱ⁾。

また、川口・森 (2007) は、教育成果における RAE に焦点を当て、学力テストや進学率・最終学歴を対象に、学年始めに近い児童生徒が有利であることを明らかにした。この研究は、制度上において平等とされる学校教育にも、相対年齢という偶発的要因が、格差を生み出していることを示した点で意義深い。同様に、小松ら (2016) も、全国学力・学習状況調査を用いて、学習時間、授業意欲、宿題への取り組み、運動習慣などの日常行動にまで RAE が及ぶことを報告した。そこでは、4~6 月生まれの児童生徒は、学力だけでなく、生活習慣や身体活動においても優位であり、相対年齢が学習成果にとどまらず、自己効力感や生活習慣の形成といった教育の基盤にまで影響を及ぼすことを示した。

さらに、スポーツ領域における長期的影響として、三田 (2016) は、プロ野球選手 3,296 名を対象にマルチレベル分析を行い、高卒選手に強い RAE が認められることを確認する一方、大学卒選手では効果の緩和を見出した。ただし、早生まれの不利は完全に解消されず、「逆風効果」として残存していることも確認している。

くわえて、山口・伊藤・中室 (2020) は、約 100 万人規模のデータに基づき、自己制御・社会性・意欲といった非認知スキルにおいても誕生日による格差が持続することを示した。その影響は学年が進んでも縮小せず、教育開始時点の年齢差が児童の経験を長期に方向づけるとする。

これら先行研究の多くは、管見の限り RAE が一時的・偶発的な現象にとどまらず、教育や進路選択、さらには社会的成功に至るまで、長期的な影響力を有する構造的要因であることを明らかにしている。しかしながら、

これらの知見は、主として統計的相関の提示に留まり、教育現場における教師のまなざしや評価行為といった実践的レベルの連関には十分に踏み込んでいない。

2. 教育的含意と未解決の課題

前節で整理したように、先行研究が明らかにしてきたのは「RAEが存在する」という事実である。しかし「なぜ」その効果が生じ、「どのように」教育実践のなかで再生産されるのか、というメカニズムは依然として不透明である。このことを踏まえると、三点の課題を指摘できる。

第一に、教師による日常的な意思決定の分析が不足している。授業や学級経営における発言の配分、役割の定位、集団内での影響力や統率性の評価といった実践的判断は、発達差を能力差と読み替える契機となり、格差を再生産する可能性がある。しかし、このような相互作用のプロセスに焦点をあて、質的に検討した研究は管見の限り見当たらない。

第二に、介入場面の特定不足である。誕生月と成果の相関が示されても、それが授業、部活動、進路指導など学校生活のどの場面で顕在化するのかは十分に明らかにされていない。すなわち RAE が「どこで」「どのように」教育実践に介入するかは見えていない。

第三に、教育改革や制度的変化との接続の欠落である。学習指導要領は1958年以降、「観察・見取り」を重視する評価観を強調し、2008年以降の形成的評価、2020年以降の「個別最適な学び」として、子どもの実態を丁寧に把握することを求めてきた。しかし、これらの制度改革が RAE の是正に寄与しているのか、あるいはむしろ現場における教師の即興的判断を通じて無自覚に再生産しているのかは検証されていない。

以上の点から、RAE 研究は存在の証明においては十分な蓄積を有するが、教育実践に埋め込まれたメカニズムの解明には至っていないことが分かる。つまり、制度的には平等を謳う学校教育においても、教師のまなざしが無自覚に構造的格差を再生産している可能性は否定できない。本研究は、既存の量的知見を批判的に検討しつつ、教師の「見取り」と評価行為に内在するバイアスを明らかにすることで、教育における選抜の不平等性をより深く解明することを目的とする。

III. 研究方法とデータ収集の概要

本章では、分析の前提となるデータ構造と収集方法、対象とした選手群の選定基準、その背景について述べる。従来の RAE 研究は、全国大会出場者や現役プロ選手など、特定時点における「成果を残した者」を対象とすることが多かった。これに対し本研究は、あえて「プロ野球ドラフト1巡目指名選手」（以下「1巡目指名選手」と略記）に限定し、その誕生月分布と競技成績との連関を検討する。すなわち、単一の時点における結果を捉えるのではなく、選抜からその後の活躍に至るまでを一連の過程として扱い、RAE が高次の評価局面においていかに作用しているのかを明らかにすることを目的とする。

1巡目指名は、スカウト・監督・球団首脳といった複数の評価主体の合意を経て成立する制度的行為であり、その公開性と権威性から「評価の到達点」と位置づけられる。本研究が焦点を当てるのは、この評価局面そのものにおける相対年齢効果である。そして、それは教育における教師の「見取り」と類比的に捉えられる。すなわち、能力そのものよりもむしろ「評価されやすさ」や「期待されやすさ」が構造的に作用する点に注目する。

基礎データとして、誕生月は1965年から2023年までの59年間に、ドラフト1巡目で指名され入団した725名を対象とした。また、競技成績（総合的貢献度）は1970年から2009年までの40年間に入団した473名を対象とした。対象期間をこのように設定した理由は二点ある。第一に、1960年代のドラフト制度は複雑で、各球団が最大30名の希望選手リストを順位付きで提出し、1位が重複した場合は抽選を行わず、外れた球団が順次繰り上げて指名する方式であったからだ。たとえば、1965年には132名の指名があったが、実際に入団したのは約4割の52名にとどまっており、分析対象として一貫性に欠ける。第二に、2010年代以降の入団者には、今なお活躍する現役選手が多数含まれ、成績の全体像を評価するには時期尚早であるからだ。もちろん、誕生月だけでなく「投手・野手」「高卒・大学・社会人経験」といった区分も収集し、分類基準に加えた。なお、データは日本野球機構の公式記録および主要な野球年鑑に基づき、公開性と信頼性の高い資料を用いた。

その上で、各選手の競技成績については、通算出場試合数、通算打席数（野手）、通算投球回数（投手）といった基礎的変数に加え、選手の総合的貢献度を示す指標として Player's Value（以下 PV と略記）を算出した。PV の算出には出野（2021）の手法を援用し、野手は打撃成績である Runs Created（以下 RC）を基にした Runs Created Above Average（以下 RCAA）、投手は Pitching Runs（以下 PR）を基本とし、守備位置補正³³を加えた。具体的に、野手については、以下の計算式を用いた。

$$RC = (a \times b) \div c$$

・ a = 安打 + 四死球 - 盗塁死 - 併殺打

・ b = 塁打 + (0.25 × 四死球) + {0.52 × (犠打飛 + 盗塁)}

・ c = 打数 + 四死球 + 犠打飛

$$RCAA = (\text{個人 RC} \times \text{守備位置補正值}) - (\text{リーグ平均 RC} \times \text{打席数})$$

同様に、投手については、次の計算式を用いた。

$$PR = (\text{投球回数} \div 9) \div (\text{リーグ防御率} - \text{個人防御率})$$

これらの指標は、数量的データと質的貢献度を組み合わせることで、出場機会の多少に左右されにくく、より精緻に選手の実力を反映する。本研究では、この PV を用いて、「入団時に最も高く評価された」選手が実際にどの程度成果を残したのかを測定した。これは教育現場において、教師が抱く「期待した子ども像」と、その後の成長との齟齬を検証する営みに相当すると位置づけた。

もちろん、出場試合数や PV といった指標は、怪我や球団事情など偶発的要素の影響を受けざるを得ない。そのため、個々の評価判断を直接的に追跡することは困難である。しかし、半世紀前後にわたる集計を通じて、「最上位の選抜局面において誕生月がどの程度作用しているか」を検証することは、教育における選抜・評価のバイアスを可視化する重要な手がかりとなる。本研究は、この視座に立ち、1 巡目指名という評価行為の構造に潜む RAE の偏りを明らかにすることを通して、教師の見取りに内在する構造的バイアスを可視化することを目的とする。

次章では、ここで得られたデータをもとに、1 巡目指名選手の誕生月分布の偏りと競技成績との連関を検討し、RAE の教育的含意をさらに深めていく。

IV. 分析—選抜における相対年齢効果と見取りの構造的偏り—

本章では、1 巡目指名選手の誕生月データを手がかりに、RAE が選抜過程にいかに関与しているのかを検証する。第 II 章で見たように、先行研究は RAE の存在自体を繰り返し示してきたが、選抜段階と成果段階の連関、さらには教育的文脈への接続には十分に至っていない。本研究では、第 III 章で整備したデータを基盤に、分析を行い、その偏りの構造を浮き彫りにする。

1. 選抜段階における相対年齢効果

1965 年から 2023 年までにドラフト 1 巡目で指名された 725 名の誕生月分布を、均等分布を期待値としてカイ二乗 (χ^2) 検定を行った。その結果、分布は有意に偏っていた ($\chi^2(11, N=725)=79.60, p<.001$)。具体的には、4~6 月生まれが突出して多く (34%)、1~3 月生まれが顕著に少なかった (15%)。さらに、3 か月ごとに区切っても同様の結果が得られ ($\chi^2(3, N=725)=73.84, p<.001$)、年度初めに生まれた者が、最上位の選抜段階で優遇される構造として、統計的に確認できた (図 1)。

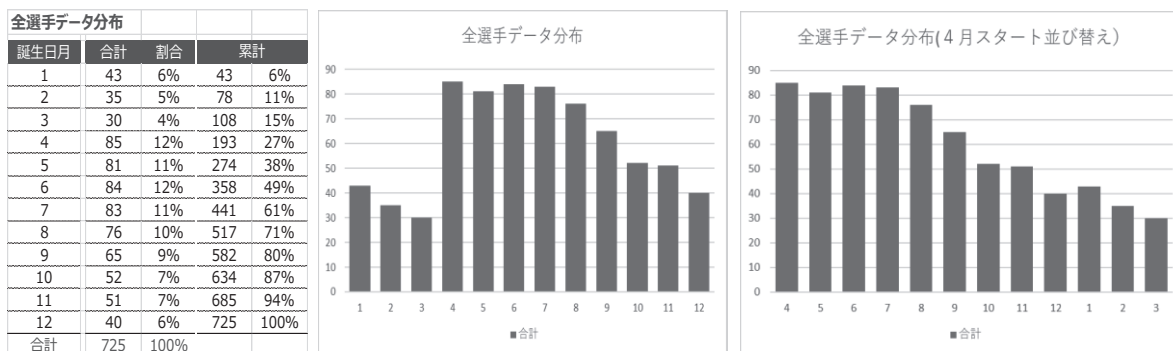


図1 1巡目指名選手725人の誕生日の分布

この傾向は、高校卒業後の入団者と大学卒業・社会人経由の入団者を比較しても共通しており、いずれの群でも選抜段階におけるRAEが認められた(図2)。ただし、大学卒業・社会人経由の群では、4~6月生まれの優位性が弱まる一方、1~3月生まれの不利は残存する傾向を確認した。これは三田(2016)の「大学進学を経ることでRAEは緩和される」という知見を部分的に修正するものであり、教育歴が延びても相対的な不利が完全には解消されないことを示唆する。

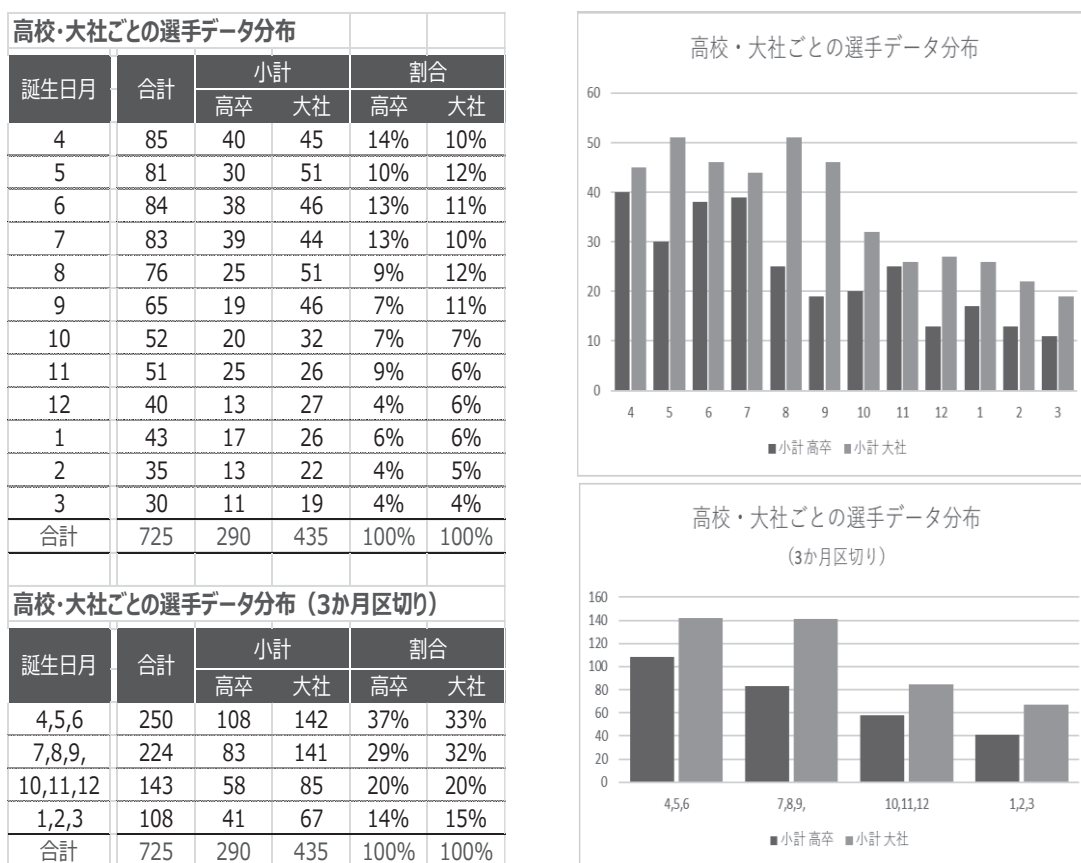


図2 誕生日ごとの高校卒業後入団、大学卒業・社会人経験後入団の人数とその割合

また、投手・野手ごとに見ても、同様の偏りが認められ(図3)、人口動態調査における出生数分布がほぼ均等であること(表1)を踏まえれば、この偏りは人口差に由来するものではなく、選抜過程そのものに構造的バイアスが組み込まれていることは明らかである。

投手・野手ごとの選手データ分布					
誕生日月	合計	小計		割合	
		投	野	投	野
4	85	60	25	11%	13%
5	81	57	24	11%	12%
6	84	61	23	12%	12%
7	83	63	20	12%	10%
8	76	59	17	11%	9%
9	65	51	14	10%	7%
10	52	40	12	8%	6%
11	51	44	7	8%	4%
12	40	23	17	4%	9%
1	43	28	15	5%	8%
2	35	24	11	5%	6%
3	30	19	11	4%	6%
合計	725	529	196	100%	100%

投手・野手ごとの選手データ分布 (3か月区切り)					
誕生日月	合計	小計		割合	
		投	野	投	野
4,5,6	250	178	72	34%	37%
7,8,9	224	173	51	33%	26%
10,11,12	143	107	36	20%	18%
1,2,3	108	71	37	13%	19%
合計	725	529	196	100%	100%

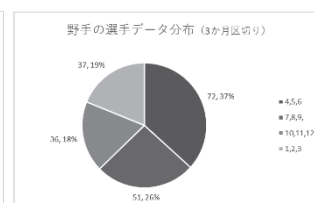
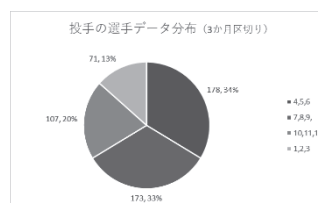
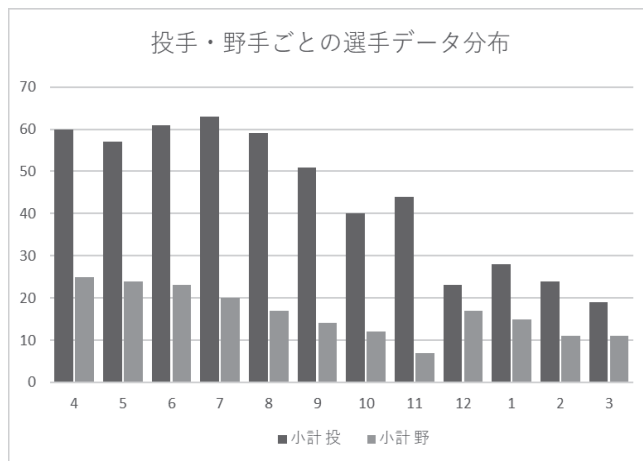


図3 誕生日による投手・野手ごとの1巡目指名選手の割合

	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
出生数													
1947	2678792	295465	226018	235891	209159	195574	194633	226560	236831	231874	229058	210764	186961
1950	2337507	256132	219654	214964	188188	170659	161891	185380	190724	191798	187863	185213	185041
1955	1730692	200116	157071	156751	148066	132368	118513	132759	142036	138323	137054	132986	134649
1960	1606041	166782	142765	149415	144241	126974	115415	125991	129803	128977	125258	123072	127348
1965	1823697	167220	151449	159421	154749	140137	135226	151439	157205	158681	159240	144084	144846
1970	1934239	174550	154966	164241	166087	160860	153129	169825	163974	157094	152911	148875	167727
1975	1901440	168095	152985	159750	159940	161271	152785	167835	164422	159301	155050	142880	157126
1980	1576889	135848	125070	129692	128240	134367	128227	138952	138266	136886	133342	120455	127544
1985	1431577	120404	110470	115172	114977	120997	116341	130375	126433	122563	123053	111961	118831
1990	1221585	104065	92531	101119	99284	106308	99869	107568	106991	102113	102899	97078	101760
1995	1187064	102692	90495	98348	95520	101422	99783	105878	105391	100759	96208	92999	97569
2000	1190547	101351	93683	98985	94902	100134	95465	102806	103706	103131	100752	96407	99225

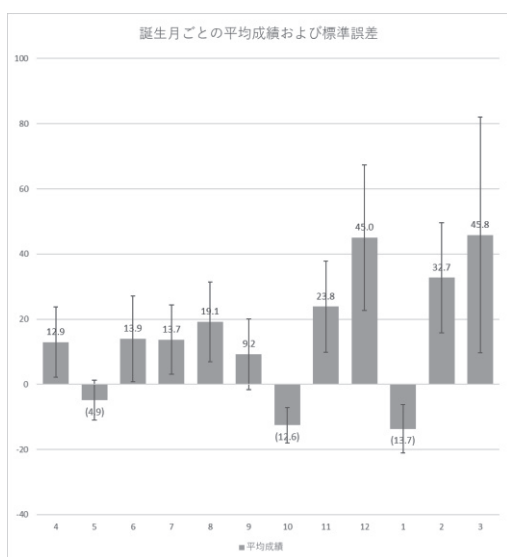
表1 厚生労働省「人口動態調査」による各年代の出生数の推移

2. 成果段階における相対年齢効果の希薄化

次に、プロ入り後の成果について、出場試合数・投球回数・打席数といった基礎的指標および総合的貢献度を測るPVを用いて検証した。その結果、誕生日による有意な差は確認されず(表2)、少なくとも成果段階においては誕生日による相対年齢効果の希薄化を確認できる(図4)。

データ	誕生日月											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
選手数	59	57	56	54	47	40	33	32	29	26	21	19
最高成績	404.1	165.4	499.7	305.4	316.7	232.4	93.7	254.9	502.7	97.1	271.8	664.3
最低成績	-82.7	-87.4	-63.4	-112.5	-66.7	-75.8	-90	-59.1	-44.8	-88.5	-74.8	-61.8
平均成績	12.929	-4.881	13.936	13.678	19.143	9.2325	-12.56	23.844	45.034	-13.7	32.714	45.837
標準偏差	82.267	46.128	97.525	77.271	82.72	68.207	30.869	77.752	118.04	37.044	75.474	153.37
標準誤差	10.802	6.1641	13.15	10.614	12.196	10.922	5.457	13.965	22.307	7.4089	16.877	36.15
出場無し選手数	2	2	5	4	4	1	1	2	3	2	1	1

表2 誕生日月ごとのPVの概観



データ	誕生日月			
	4,5,6	7,8,9	10,11,12	1,2,3
選手数	172	141	94	66
最高成績	499.7	316.7	502.7	664.3
最低成績	-63.4	-66.7	-44.8	-61.8
平均成績	7.35	14.24	17.6	18.21
標準偏差	78.725	68.246	88.497	119.19
標準誤差	6.0203	6.5018	7.0685	10.956

図4 誕生日月ごとの平均成績

この結果は、川口・森（2007）が、学力や最終学歴に至るまでRAEの影響が持続すると報告した知見や、小松ら（2016）、山口・伊藤・中室（2020）が、日常行動や非認知スキルにまで格差の広がり示した知見と対照的である。すなわち、教育領域においては相対年齢の影響が学齢を経ても残存する一方、プロ野球の最上位選抜層では成果段階に至るまでの過程でその影響が薄れていく可能性を示唆するものとなった。

また、尾見・榊原（2005）の分析は、学年制度がスポーツにおける初期の選抜過程に強く作用し、とりわけ日本では誕生日による格差が顕著に表出することを明らかにした点で意義深い。本研究の結果は、その強さが「選抜」から「成果」へと自動的に持続するわけではないことを示す。すなわち、1巡目指名という最上位の評価局面において、RAEが観察される一方で、プロ入り後の競技成績においては、その差が統計的に有意に確認されなかった。

このように、選抜段階では強く作用したRAEが、成果段階では失われていくという乖離は、RAEが構造的に内包する「評価されやすさ」と「実際の成果」とのずれを示唆する。この含意は教育領域にも通じ、教師のまなざしや評価が、ある時点における子どもの「見えやすさ」に強く規定される一方で、その評価が長期的成果と必ずしも一致しないことを浮き彫りにする。こうした視点は次節で検討する「見取りの構造的偏り」へと直結しており、教育実践における評価の在り方を問い直す重要な契機を提供するものである。

3. 見取りの構造的偏り

前節までの分析が示した「評価と成果の乖離」は、教育現場における教師の「見取り」にも通じる問題を浮かび上がらせる。すなわち、誕生日に起因する発達差を十分に考慮せず、標準化された基準に依拠するならば、成

熟の早い児童が「有能」と見なされ、相対的に未熟な児童が「不十分」と評価されやすい構造が生じる。この構造は、学力や技能そのものの差というよりも、教師の期待や比較の枠組みによって形成される評価の偏りと捉えることができる。

こうした偏りは、児童の努力や潜在的な成長を適切に読み取ることを難しくし、教育の公平性を損なう要因となり得る。特に、選抜段階で顕著に作用した RAE が成果段階で減衰したという本研究の結果は、教師の評価や観察もまた、児童の将来的な学習成果や発達可能性を必ずしも正確に映し出さないことを示唆する。

したがって、RAE は単なる誕生月の偶発的要素としてではなく、教師のまなざしを通して構造化される教育的現象として理解されるべきである。本研究の知見は、児童評価に潜む構造的な偏りを可視化し、教育現場における「見取り」の在り方を問い直すための手がかりを提供する。次章では、この偏りをいかに是正し、教師の評価実践を再構築し得るのかを検討する。

V. 結語—相対年齢効果が問いかけるまなざしの社会性—

1. 見取りの構造的偏りと教育評価の再構築

教育の文脈においても、学年という制度的枠組みの下で、教師がどのように児童を「見取り」、評価し、支援を選択するかといった判断の連鎖は、子どもの成長や進路に大きな影響を及ぼす。先行研究が示すように、誕生月は学力や進学率、最終学歴にまで持続的な影響を与える。その背後には、教師が児童を評価する際に働くまなざしが常に介在している。

そのため、教育現場では、提出物や学習態度に遜色がなくても、相対的な発達差が評価に影響する。たとえば、学年の早い時期に生まれた児童の水準が無意識のうちに基準化されれば、同じ努力をしても学年の遅い時期に生まれた児童は「伸びが足りない」と見なされやすい。この構造は、標準的な発達観に依拠した教師の期待が評価を歪める典型的なパターンといえよう。教師の見取りは単なる事実認識ではなく、「どの水準に達しているべきか」という期待値や発達観と結びついた実践であり、そこに偶発的な誕生月が組み込まれると、RAE は教育実践の中で無自覚に再生産されてしまう。ピグマリオン効果やゴーレム効果が示すように、教師の期待は学習者の行動や自己認識を方向づけ、教育の公平性を損なう要因となり得る。

とりわけ、近年の教育制度は「個別最適化学び」や「形成的評価」を掲げ、多面的な評価を推進している。しかし、その実施は依然として教師の経験知や観察力に大きく依存しており、制度理念と現場における実践との間に乖離が生じる。そのため、「個人内評価」を標榜する場面では、標準的モデルとの比較が無意識に入り込み、遅い時期に生まれの児童が「まだ届かない」と不当に不利な評価を受ける危険性がある。つまり、努力が成果として認められない背景には、児童の能力ではなく、教師が設定する基準そのものに、偏りが潜んでいるといえよう。

こうした構造的偏りを是正するためには、教師の見取りを個人の判断に委ねるのではなく、複数のまなざしを交差させることや、支え合いが不可欠である。たとえば、評価段階における複数教員の協議、養護教諭や担任外教員との協働観察、さらには児童自身の語りを反映させたポートフォリオ評価などは、まなざしの多元化と透明性を高める有効な方策となり得る。くわえて、校内研修の場における RAE や発達差に起因する見取りの偏りを扱うことで、自らの評価がどのように有利・不利をもたらしているのかを省察することも重要である。評価制度を形式的に整備するだけでなく、教師が「見る」という営為に価値判断や力関係が不可避的に組み込まれていることを認識し、その重みと責任を引き受けながら実践を問い直す姿勢こそが求められる。

このように、本研究の知見は、RAE が単なる誕生月の効果ではなく、「誰にどう見られるか」というまなざしの社会的作用を問う現象であることを示した。教師の見取りは、学習者の未来に直結する実践である以上、その枠組みを不断に問い直し、省察を重ねる姿勢が不可欠である。公平性は標準化された基準に依存するのではなく、児童一人ひとりの固有の発達を丁寧に読み取り、それに応じた支援と評価を設計する営みの中にこそ宿る。相対年齢という偶発的要素が構造的格差に転化しないためには、教師が自らのバイアスを言語化し、共有し、調整する取り組みを積み重ねていくことが欠かせない。ここに、RAE を教育的に位置づけ直す意義があり、教育評価の再構築に向けた学術的・実践的課題が見いだされる。

2. 本研究の限界と今後の課題

もっとも、本研究にはいくつかの限界がある。分析対象はプロ野球の1巡目指名選手に限定されており、スポーツ領域に偏っている。教育現場に即した大規模データや縦断的な追跡調査を用いれば、RAEが学級内でどのように作用し、どの段階で希薄化していくのかを、より精緻に把握できるであろう。また、教師の見取りの偏りを数量的に捉えるだけでなく、授業観察やインタビューといった質的手法を組み合わせることで、教師がどのようにまなごしを形成し、評価を行っているのかを立体的に描き出すことも可能となる。

本研究で明らかにしたRAEと「見取り」の関係は、その一端にすぎない。今後は教育制度間の比較研究や国際的データも参照するなかで、RAEの構造的作用をより普遍的に把握し、教育評価を再構築する理論へと発展させていく必要がある。そこで、より詳細な検討については、今後の研究課題として位置づけたい。

引用・参考文献

- ・ 出野哲也 (2021) 『プロ野球「ドラフト」総検証 1965-』言視舎
- ・ 岡田猛 (2003) 「相対的年齢 (Relative Age) としての生まれ月とスポーツ参与—先行研究のレビュー—」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第54巻、pp.95-110
- ・ 岡田猛 (2011) 「相対的年齢としての生まれ月と高度スポーツへの社会化—大相撲—」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第62巻、pp.69-79
- ・ 尾見康博・榊原禎宏 (2005) 「学校歴にもとづく時間リズムがプロスポーツ選手になる確率に及ぼす影響—アメリカの野球とイタリアのサッカーを事例として—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第7巻2号、pp.189-192
- ・ 川口大司・森啓明 (2007) 「誕生日と学業成績・最終学歴」『日本労働研究雑誌』No.569、pp.29-42
- ・ 小松良之・小澤淳・窪田慶之・黒島大貴・寺島徹 (2016) 「生まれ月が小中学生の学習・運動習慣に与える影響」『早稲田商學』447-448、pp.67-93
- ・ 榊原禎宏・尾見康博 (2005) 「誕生月はプロスポーツ選手になれる確率を変えているのか?—日本の教育実践における社会的背景—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第7巻1号、pp.189-193
- ・ 三田泰雅 (2016) 「生まれ月の順風効果と逆風効果—プロ野球選手のマルチレベル分析—」『四日市大学総合政策学部論集』13、pp.71-84
- ・ 山口慎太郎・伊藤寛武・中室牧子 (2020) 「Month-of-Birth Effects on Skills and Skill Formation」『RIETI Discussion Paper Series 20-E-79』(独立行政法人経済産業研究所) pp.1-61
- ・ 厚生労働省 (各年度版) 「人口動態調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html>

[附記] 本報告は、科学研究費助成事業・奨励研究(課題番号24H02370、研究代表:森脇正博「普通/特別教室における視線配布行動の比較分析—教師—児童間の方略と生成に注目して」)による助成を受けて実施した研究の一部をまとめたものである。

ⁱ 日本の学校制度では、4月2日から翌年4月1日までに生まれた児童が同一学年として編成される。この制度のもとでは、たとえば3月生まれの児童を「月齢1歳」とすれば、4月生まれ(4月1日生まれを除く)は「月齢12歳」となり、小学校入学時点での発達差は実に12か月、すなわち6歳(72か月)と7歳(84か月)の差に相当する。この差は、月齢ベースで換算すると約14%の身体的・認知的ビハインドとなる計算であり、幼児期における発達段階においては無視できない程度の差異である。

ⁱⁱ たとえば「セリエAの結果も、日本のような学校歴と深く関わった傾向は見られなかった(191頁)」と結論付けている。しかし、イタリアの新年度は9月に始まり、その年度に入学するのは前年12月31日から当年12月31日までに6歳となる児童である。この制度的条件を考慮すると、論の中で示されたデータには相対年齢効果の内在が確認できると解釈できるものの、その視点が十分に吟味されていない。すなわち、当該分析の結論には再考の余地がある。

ⁱⁱⁱ 同じ打撃成績でも、守備位置の違いや指名打者か否かなど、負担の違いを考慮する必要がある。そのため、守備位置補正值として、捕手=1.24、一塁=0.87、二塁=1.10、三塁=0.97、遊撃=1.13、左翼=0.93、中堅=0.97、右翼=0.97、指名打者=0.83という守備位置別の難易度を示す係数を適用した。